

台風0423号災害による死者の発生原因について

牛山素行(東北大学講師・防災研究所非常勤講師)

1. はじめに

2004年10月20日～21日の台風0423号(国際名Tokage)および停滞前線の活動による災害では、死者・行方不明者96名(11月29日消防庁資料)が生じた。この人的被害は、島根県を中心に発生した「昭和58年7月豪雨」(死不明者117)以降最大のものとなった。人的被害発生場所は18府県に分散し(図1)、特定の場所の特定の原因で集中的に犠牲者が生じた訳ではないことが特徴的であった。そこで本研究では、多くの死不明者が発生した原因の調査を試みた。

2. 調査結果

消防庁資料、各府県発表の資料、全国紙、各地方紙、現地住民や報道機関に対するヒアリングなどを行い、死者不明者の発生原因を以下の5種類に分類した。

- ①高波: 沿岸部での避災。高波による家屋損壊による死亡、作業中もしくは見物中に波にさらわれるなど。
- ②強風: 屋根などで作業中、風にあおられて転落する、飛来物に当たる、強風による倒木等に当たるなど。
- ③洪水: 屋内の浸水による溺死、歩行中に流されて溺死、浸水した道路で自動車運転中に流されるなど。
- ④土砂: 土砂崩壊により倒壊した家屋の下敷き、土砂崩壊・土石流に巻き込まれる。
- ⑤事故型: 沿岸部以外で、「洪水」や「土砂」に含まれない者。田などの見回りで誤って水路に転落するなど。

図2に示すように、死者不明者96名中、約3割の31名が「洪水」による死者である。近年の豪雨災害では、洪水による直接的な死者は少なく、7月新潟・福島豪雨で12名が洪水によって死亡したことが大きな特徴であったが、今回はこれを大きく上回った。洪水によって30名以上が死亡したのは、1982年長崎豪雨災害以来である。

年代別に見ると、65歳未満41名、65歳以上54名、不明1名で高齢者が6割だが、新潟・福島豪雨(65歳以上8割)高齢者ばかりが犠牲になった状況ではない。要因・年代別に見ると(図3)、特に洪水による死者では、65歳未満の方がむしろ多かったことがわかる。

洪水による死者のうち、浸水した自宅に取り残されて死亡したことが確実な者は3名(いずれも65歳以上)で、ほとんどは歩行中や車で移動中に流されて死亡したケースである。奇跡的に救出されたものの、由良川下流の舞鶴市八田付近では、観光バスの37名が浸水域に取り

残された。付近では他に2名が運転中流され死亡した。

このような移動中の死者が多数生じたのも、近年の災害としては異例である。移動中は、周囲の状況把握がしにくく、防災情報の取得も容易ではない。いわば、年代と関係なく、災害弱者に近い状況になっているとも言える。今回の被災者は状況把握ができず、不用意に浸水域に近づいたために遭難したことも考えられる。このような問題は今回の災害であらためて顕在化したものと思われ、今後さらに対策・検討を進める必要がある。

土砂災害による死者は、屋内にいたまま、すなわち避難をしない状態で土砂に巻き込まれたケースが多く、高齢者の比率も高い。気象庁から、「過去数年間で最も土砂災害の危険性が高い状態」という情報が、市町村程度の分解能で出されるようになってきているが、まだ十分活用されていない面がありそうである。

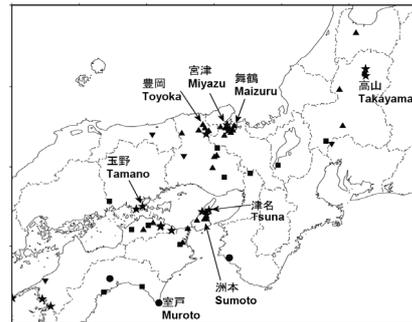


図1 死者発生箇所分布図

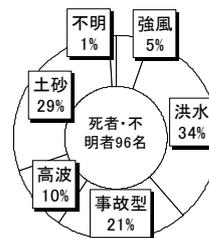


図2 原因別死者数

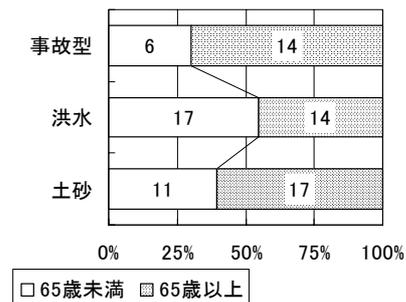


図3 原因・年代別死者数